

人とペットのパートナーシップ — HAB (Human Animal Bond) の与えてくれるもの

People & Pet Partnerships — Benefits of the HAB

国際獣医コンサルティング CEO・トーマス E .カタンザーロ
Thomas E. Catanzaro, DVM, MHA, LFACHE,
CEO, Veterinary Consulting International



○トーマス・カタンザーロ どうもありがとう。

まず、私の名前の下にいろんな略語がありますけれども、英国ではこのような形でいろんな略を使います。こういった略語をたくさん持っている人がアメリカでは勝者だと言われるわけですが、MHAは、master of health care で、……ユニバーシティのほうで学位を取っております。LFACHEは life fellow of American College of health care executive の略語になります。ABMAは、American……association、ここでは1万9,000人の獣医が入りました組織になります。このように略語をたくさん扱って申しわけございません。【スライド 01】

では、オーストラリアから来た外人は、そもそも誰なのかというお話からしたいと思います。オズと呼んでるわけですが、この前の世代での、英語の世代ではオズとなっています、これはオーストラリアのことです。私は1977年から78年の間、もともと横浜に住んでいて、その後、1979年と1980年に相模に住んでおりました。そのときに麻布獣医大学で英会話を教えていました。当時、素晴らしい獣医の方々と一緒に仕事をすることができました。そして、私は1981年からデルタ協会のチャーターメンバーです。また、American association of Human-Animal Bond Veterinarians、1983年からのチャーターメンバーになっています。そして、その後、コンパニオアニマルのスピーキングツアーで1994年に日本にまた戻ってまいりました。20年ぐらい前の話になりますが、そのときは大阪にも参りました。それから、ペットボンドのボンドメンバーです。ペットボンドというのは、業界とHABの獣医のパートナーシップになります。また、Promoting the Human Animal Bond in Veterinary Practice という本の著者でもあります。これは今現在、第2版ということで、無料でウェブ上でも提供しておりますVINライブラリーにアクセスしてください。そして、2008年にオーストラリアに引っ越ししました。【スライド 02】【スライド 03】

こちらのほうがVINライブラリーの写真です。ダウンロードいたしますと、250ページほどございます。

きょうの説明などに関しましては、レオ・ビュースタット先生の話から始めようと考えました。ワシントン州立大学のディーンでしたビル・マクロックさんと1970年代に初めてお会いしたわけですが、最初

のデルタの会議に参加いたしますときにビルさんもおられましたし、レオさんとも会いました。その後、レオとビルと一緒にしましてデルタ協会をつくったわけです。30年前の話になります。こういった創設者の愛と努力の結晶で、これができたわけです。そして、レオ先生がヒューマン・アニマル・ボンドという言葉を利用したわけです。【スライド 04】

レオさんこそがHABの先駆者であって、代表者であるということです。そして、その後、名前は変わりました。2012年にペットパートナーという名前に変わっています。それから、私はレオさんからヒューマン・アニマル・ボンドに関しますインスピレーションを得たわけです。それをこれまで私自身も実践してまいりました。

こちらがレオ先生の写真です。ここに幾つか、他の著者の言葉を紹介したいと思います。この言葉ですが、まさにヒューマン・アニマル・ボンドの深みをあらわしていると思います。1975年、ワシントン州立大学にて、ビュースタット氏とリンダーハインズ氏が people of pet partnership & prison pet partnership を開始いたしました。そして、その後、1981年にPPPはマッカロック兄弟とともにポートランドでデルタ財団を設立いたしました。ここで、PPPの関係です。これはもともと研究ということで、ペットがメンタルヘルスにどのような影響を与えるのかを研究したわけです。それで1983年に、例えば動物たちを使いまして、子供の芸術に関する飛躍にも関与いたしました。【スライド 05】【スライド 06】【スライド 07】

こちらがレオさんの若いころです。私が子供のときもそうだったわけですが、当時、ペットはぜいたく品か不要品と思われていました。多くの場合は不要品と思われていたわけです。こちらがレオ・ビュースタット先生の言葉です。読みはいたしませんけれども、こういった言葉を残していらっやいます。【スライド 08】【スライド 09】

レオさんは、第二次世界大戦のときにイタリアで戦争捕虜となっていました。これでレオさんの人間が少しわかると思います。一番右側の下を書いてますけれども、心の自由というのは、基本的に論理的、精神的なものである、倫理的、精神的なものであると私は信じる。真の自由とは、好きなことをすることではなく、しなければならないことをする力であると彼は言っています。



これはマーガレット・ミードさんの言葉です。大変有名な著者でもあります。あなたがどこにいるのか、いつ帰宅するのか、心配してくれる誰かがいるということが、昔から人間が最も必要としてきたものであると。私がまず家に帰りますと、ペッケンを探します。ペッケン帰ったよと言うわけです。ペッケンというのは、私の猫です。彼女は必ず私のところに来てくれます。【スライド 10】

動物は生活を変えてくれます。デルタ協会が一番最初に 1981 年に行いました、そして 82 年、83 年にも教材をつくりました。そして、教育用の資材をつくったわけです。毎日の中で日常生活への応用に関します教材をつくったわけです。そして、またトレーニングプログラムをつくりました。H A B に関しますクリソグハウスとなりました。そして、地元レベルで、1990 年代にサービスも直接提供するようになりました。そして、それをさらにアメリカのいろんなところへと広げていったわけです。そして、動物介在セラピーですけれども、包括的なトレーニングを提供しております。最初の A A T のセッションに関しましてもそうですし、またサービスドッグのトレーナーにトレーニングを提供することも開始いたしました。そして、今では世界じゅうに提携団体を持っています。【スライド 11】

デルタドッグというオーストラリアの組織ですけれども、これは大変重要な組織となっております、犬の適切な行動について学ぶ組織となっております。適切な行動とは、皆さん、理解してらっしゃると思いますけれども、それを実際に講師として体系的に説明しているわけです。きょうはこういった科学的な会議になりますので、学術的な話も少ししたいと思っておりますけれども、ここに書いてますように、あなたの犬があなたを見詰めるとき、あなたが恋しているときと同じ物質が脳から発生しているということです。それから、動物というのは、高齢者にとりましては、毎日の生活の糧になっているわけです。すなわちきょうのことを考える、昔のことを思い出すのではなくて、高齢者たちが毎日のことを考えることに役立つわけです。【スライド 12】

例えば、高齢者の施設に通常はテレビの上に鳥かごを置くわけです。テレビを見ているときも鳥を見ている

わけです。そのときに彼女は肩の上に手を上げて世話をする必要のあるわけです。えさをやったりですとか、または水をかえてやったりですとか、そういったことをするわけです。そのように、通常はリモコンだけを使って肩を動かさないわけですけれども、鳥がいることによって、肩の状態がよくなったということです。そして、実際に現実世界のことを考えることができる。毎日の日常生活に戻されるわけです。したがって、昔のことばかり思い出してるわけではないということです。そして実際、心臓手術後、動物がいるとき、犬がいるときには、1 年の生存率が 5 倍になることも言われております。【スライド 13】

もしかしたら、どちらが先なのかと言われるかもしれませんが。犬が人を癒やすのか、人が犬を癒やすのかですけれども、私はそれはどちらでもいいと思います。基本的には、例えば 1 日 2 回散歩に行くですとか、そのようなことが心臓手術後の生存率を高めてることになっているわけです。そして、毎日えさをやったり、ブラッシングをしたり、お風呂に入れたり、散歩したり、そのような日常のルーチン枠が楽しみであるということです。このルーチン枠によって動物との接触があるわけです。

多くの人は、今、1 人で住んでいます。私自身も今、1 人で住んでいます。猫を飼っておりますけれども、朝と夜にえさをやって、ブラシをかけてやります。今、猫を 2 匹飼ってるんですけれども、食事を準備したりとか、また庭で遊んでるのを見るのは、私にとりましても本当に楽しいことです。こういったことをほかの人にも話をしています。【スライド 14】

それから、アイコンタクトも重要です。行為により言葉はないけれども、毎日世話をしたり、かわいがったりすることが、私の生活を豊かにしてるわけです。私と猫はベッドでも寝ています。そして、もう 1 つ、黒い猫ですけれども、私の両側に猫が寝ているようなことがよくございます。……のような猫ですけれども。

ここでスライドをお見せしたいと思います。大変重要だと思います。

【スライド 15】(スライド上映)

犬とのコンパニオンシップを楽しんでいます。
無償の愛を与えてくれます。

現在、セラピーサービスドッグを 3 頭抱えています。1 頭からスタートをして、これによってうまくいったので、頭数がふえてきています。彼らはどこでも好きなどころに行くことができます。犬はいろんな活動をしているところのどこにでも行きます。いかつい男性たちがありますが、みんな交流を楽しんで、かわいがっています。

この子は、いつも僕のところに來ます。彼は僕を選んでくれたみたいで、車椅子にいるときもやってきました。メンタルサポートをこういった人たちに与えてくれる、そして犬と一緒にこのように歩くことがトレーニングになっています。精神的な疾患、病を抱える人たちにとても大きな癒やしになっています。誰かが一緒にい

てくれて、愛してくれていることがサポートになっています。いろんなけがをした人がいますが、サポートになっているわけです。【スライド 16】

車椅子からおりて何かをして、また戻ることを犬が助けてくれます。外に出て散歩をするときも、犬と一緒に活動したいと思っています。車椅子にいるときも、いつも僕の隣にいてくれて、ベッドに行くときも一緒でした。全ての犬は、きちんと評価をしてやってきます。きちんとした基準が設定されていて、それを満足したものだけがやってきます。大型犬です。そして、例えばウェイトベアリングをするなどのときもつき合えるような大きな大型犬が通常は選ばれます。サービス犬は 50 人の人たちが活用しています。快適さ、それから充実感だけではなく、メンタルなサポートも得られます。ひとりぼっちではなく、犬は批判することなく、無償の愛を与えてくれる存在です。彼のために私は幸せを感じます。将来は私自身の動物が欲しいと思っています。【スライド 17】

獣医学部に行く前に陸軍で経験をしたことがあり、そこでも人と動物のきずなが大切だとわかります。兵士たちが戦場から戻ってきて、非常に筋骨隆々のマッチョな男性ですが、セラピードッグを大変かわいがっています。あと 2 つ、ここに文献から取りました言葉の引用があります。忘れてならないのは、動物というのは多くの文化の中でなくてはならない生活の糧でもあることです。エジプトのヒエログリフの中にもヤギを飼っていたことが書かれています。中近東で今もそうです。また、ラクダもいます。そして、私たちの人生をコンパニオンアニマルは豊かにしてくれます。公共ドッグパークに行くと、犬を連れてきて遊ばせているのを見るのが好きです。道路ではかまないように拘束具を着けていますが、そこではもう犬も、飼っている連れてきた人もお互いにおしゃべりをしたり、遊んで開放されているというのが 70 年代にもありました。プライベートでも、公共の場でも、うれしい時間となります。また、肉体的な、精神的な安全、これは後で述べたいと思います。【スライド 18】

また、人間以外の動物とも会話があります。育てる、世話をする機会を与えてくれる、偏見なく、公平な愛情や献身をもらえる。ペットがいなくて、偏見がない公平な愛情は得がたいときになってきています。

先ほど少し述べましたが、自閉症の子供についてです。小さな男の子は自閉症です。白と黒の犬が……おりましたが、白の犬に黒いベストを着けて、そのベストを持って自閉症の男の子もショッピングモールを歩いています。【スライド 19】

自閉症の子供というのは、壁に近いところにいて、余り他の人たちと交流しませんが、この白い犬にベストを着けて、そこのハンドルを持っています。そこから赤いリードを伸ばして、ちょっと離れることもできるようになっているんですが、常に犬のいるハンドルのところに戻ってきます。大切なことですが、そのきずながセラピーとなっているんです。

これは日本語では失われてしまっていますが、韻を含んだ詩になっています。日の光は空から降ってくるものじゃなくて、私の愛犬の瞳の奥からやってくるということで、スカイズとアイズが韻を含んでいます。【スライド 20】

先ほど申しましたが、動物はミルクを取る、……、移動手段、畑仕事などに使われ、ふんは乾かして料理のときの燃料になります。日本やオーストラリアでは、動物のふんを使って燃料にすることは無いですが、アフリカだと、常に燃料として使っています。ボーイスカウトなどで燃料に使うことを教えています。【スライド 21】

こちらが私たちの憲章です。動物介在療法の歴史は、人類の歴史とほぼ同じです。エジプトのヒエログリフにも書かれているということを申しました。動物介在活動は、その後、始まりました。そして、私たちは分類して見ていく必要があります。ヒューマン・アニマル・ボンドは、動物と彼らにかかわる人間との間に存在する無償の愛であると言えます。また、動物がいかに私たちの人生を豊かにしているかを説明するときを使う言葉でもあります。動物には下心がありません。中には、動物はえさとシェルターを求めて行動すると言う人もいますが、そうじゃないということは、経験上、明らかです。【スライド 22】

ここに 1 つの実話があります。彼の犬がスピード違反の車にはねられました。それで彼は犬を抱きかかえて、道路の端に座り込んで泣いていました。犬は彼の顔を見上げて、最期の力を振り絞って、彼の涙をなめました。私は、これを読むと必ず涙が浮かんできます。言葉は要りません。わかります。【スライド 23】

動物主体の考え方を理解する必要があります。動物は、リラックスするときは、体も頭も心も休めます。人間は、そこまで完璧にリラックスすることができません。雑念を追い払うことができないんです。常に批判しようとしません。動物にとってのストレスは、戦うか、逃げるかの刺激を受けることです。人間はしばしば自分の存在の意味を自問してストレスを感じます。動物は、私たちの気分を高揚させ、人生の質を充実させ、今をどう生きるかを教えてくれ、日常の世話をしてくれる人が与える関係に誠実です。これらの資質は、動物介在活動や動物介在セラピー、そして H A B の関係に不可欠なものです。【スライド 24】



これはアメリカ獣医師会の調査が2011年に行われた結果です。犬を飼っている人の家族のほとんどが家族、コンパニオンと考えていて、所有物と思ってる人が0.7%、猫の場合は所有物と思ってる人が2.4%、動物病院の壁の外で何が起きているかについて言いわけをするのはやめましょう。彼らペットはコンパニオンであり、家族なんです。

H A Bは、健全で存在しております。アメリカで9.11事件が起きました。貿易センターに飛行機が突入した事件後、人々は買い物、映画、レストランなどに行くのが怖くて、家にこもる人がふえました。でも、そこには喜んでくれるペットがいました。獣医は、家族、飼い主にどうするべきかをその年に言っておりました。【スライド25】

選択肢を飼い主に与えるのは、最後の四半期は決定を下したくない、どうせよ、こうせよと言われることに従いたくないということで、よくない年でした。でも、ストレスのある状況下では、コンパニオンシップがふえます。コンパニオンの動物の偏見のない愛が癒やしを与えてくれます。ペットはストレスや疎外感を減少させてくれます。孤独感を予防して、鬱状態を緩和して、他のほとんどの人間関係と違って、何の下心もないわけです。【スライド26】

こちらは軍役犬です。現在、セラピードッグを退役軍人で外傷後、ストレス症候群 P T S D に苦しむ人たちのためにセラピードッグのトレーニングを行っています。いろんな難しい言葉が使われるようになっていますが、戦場から戻ってきても、ストレスが戦場で負荷されて、戻ってきてもそれが続くわけです。セラピードッグによって癒やしの効果があり、不安レベルが低下していきます。肉体的、感情的に安定し、またコンパニオンドッグは偏見のない愛を与えてくれます。それによって、P T S D 治療の投薬量を減らすことができます。トレーニングする人にも、される人にも、両方に効果が上がります。

【スライド27】【スライド28】【スライド29】(ビデオ上映)

4分半のビデオです。全て何か爆発物のように感じるようになりました。もう集中もできなくなって、こういったものばかり見ていると、そのように感じるようになりました。こういった記憶は、私の人生の中でずっと持っていく必要があるのだと考えました。爆弾だとか銃弾、そういったものが兵士の精神に影響を与える、それが P T S D になります。鬱、不安、そして人を恐れたり、公共の場に出ることを恐れるようになり、生活を恐れるようになります。そこでセラピーが必要になります。また、退役軍人は、さらなるセラピーが必要になる。さらに信頼できるようになる、信頼というのをなくしてしまっている人たちは、自分たち自身に対します信頼もできなくなっている。誰がそういった人々を助けることができるのか、何かほかの人を信頼することができるのか、できない場合は誰を信頼することができるのか。

いろんな形でサービスドッグは P T S D を癒やすこ

とにつながります。こういったサービスドッグは、ストレスの状況に対しまして特定のトレーニングを受けています。公共の場においてはバッファゾーンをつくらせたり、部屋の中で不安な状態になる要素をなくします。オーナーが不安になっているときにも助けてくれるわけです。

私を現実へと戻してくれるのが、この犬です。私が現実から離れているときです。直接のトレーニングプログラムが必要になります。P T S D、これは退役軍人自身がこの新たな友達と一緒にトレーニングを受ける必要があるわけです。一緒にということ。そこでチームをつくるわけです。退役軍人を P T S D から解放するためにはしっかりとしたトレーニングが必要になりますし、献身も必要になります。少なくとも24カ月のトレーニングが必要となります。多くの犬というのは、シェルタードッグで、この犬も2回目の生きるチャンスを得ることができるわけです。

トレーニングですけれども、できるだけ感情をポジティブにする方向に持っていきます。そして、サービスドッグと一緒に時間を過ごすことによって、より大きな効果が出てくるわけです。また、生きるための目的がわかるようになり、外に出る自信も出てきて、よりよくほかの人たちとも対話ができるようになります。このように条件つきではない愛によって、人は徐々に回復していきます。そして、安全だと考えるようになり、家族たちの世話もよくできるようになります。

このような退役軍人、これは例えばペットがいることによって安心感を感じることができ、いろんなインタラクションができるようになります。そしてまた、その後、人と話ができるようになって、最終的に彼女は医師になりました。私は、もっと自信が持てるようになりました。

……さんです。常に焦燥感があるような人でした。この治療を受けることによりまして、よりよい父親になり、よい教授にもなりました。私は、もう一度人間として、この犬からどのように生きればいいのかを教わったのです。

戦場から帰ってきて、P T S D になった人たちは、回復するために次のステップを必要としているわけです。今すぐに行動を起こしてください。そして、退役軍人たちが P T S D と戦うのを助けてください。

21年間、私は軍で仕事をしておりました。実際にベトナムから帰ってきたとき、こういったプログラムはありませんでした。今はオーストラリアに住んでいるわけですが、ベトナムの退役軍人が最初に……14年もかかったわけです。そして、P T S D だったとしても、ベトナムの退役軍人というのは診断を受けることができませんでした。今になって、ようやく診断を受けているわけです。というのは、ようやく今になってわかってきたからです。P T S D は、もともとそういった症状自身に診断がつかないわけです。ですけれども、人と犬が一緒になることによって、大きな治療の効果が見られるようになりました。【スライド30】

テキサス州サンアントニオです。ここで小児がん病棟のお話をしたいと思います。子供たちのためにウサギを持っていったことがございます。そして、子供たちはウサギをさわることによって、本当に感触がよいということで、孤独で暗く重苦しい病棟の状況が一気に変わりました。【スライド 31】

実際にその後、何が起こったかといいますと、スタッフですとか、医療従事者が小児がん病棟にたくさん訪れるようになりました。前はそういったことはありませんでした。もうがんで亡くなる直前にあるような子供たちがたくさんいる小児がん病棟に誰も来なくなかったわけですが、ウサギを置いたことによって、多くの人に来るようになりました。親も、スタッフも、医師も、そして子供たちもよりよい感情を持つようになったわけです。また、動物由来感染症の心配というのは、今のところございません。……寄生虫に関しましても問題が起こってないということです。【スライド 32】

この下に書いてますように、その人のために何もできない、こんな小さな命をどう扱うかで、その人の人格がわかると書いています。犬であったり、猫であったり、ウサギであったり、何でもよいと思います。このように動物のセラピー、AATのベネフィットは実際にそこに存在するという事です。

私のマスターにおいて、コロンビアで、実際にはニューヨークのブルッキングでマスターコースを受けてたわけですけど、そのときに死亡学、サナトロジーを学びました。キューブラ・ロスは死の受容の5段階というもののコンセプトを提唱いたしました。ここに書いてあるものは、否認、そして怒り、取引、抑鬱、受容ですけども、この5つの段階を経て、ようやく悲しみを受容の段階まで持っていけるということです。そして、また無料でダウンロードできるVINテキストがございます。これは私自身の教科書ですけども、無料でダウンロードできますので、ぜひ見てください。【スライド 33】

ビュレット 21 という犬を持つ高齢の女性と会ったことがあります。この犬は変わった名前ですね。どうしてビュレット 21 って、この犬を呼んでるんですかと言いました。この犬は私の 21 匹目のジャーマン・シェパードなんですと言いました。私はびっくりいたしました。21 匹目と聞いたわけです。私はニューヨークに住んでいて、とにかく安全でいたいからジャーマン・シェパードを飼ってたんだ。1 匹が亡くなると、また地元のシェルターに行って引き取って、それが死ぬとまた次のジャーマン・シェパードを引き取ってということをやった。そして、全てビュレット 1、ビュレット 2 ということで、同じ名前をつけてるんだと。そして、これまで亡くなった 20 匹に関しては、ロングアイランドに埋葬してると言いました。そして、毎週日曜日になりますと、それまで亡くなった 20 匹の犬の墓を訪れるということでした。とにかく犬によって守られてる、そして偏見のない愛が彼女にとっては重要だと言ってくれました。これはヒュー

マン・アニマル・ボンドのコンセプトそのものだと思います。この 1 人の女性の話が全てを語っていると思います。【スライド 34】

サンアントニオに行ったときにホスピスで仕事をしましたことがあります。ホスピスは、定義で言いますと、基本的には医師がもう諦めて、6 カ月ぐらいで亡くなってしまうような人たちを集めた施設になります。サンアントニオのホスピスに行ったことがあります。そこにいる人たち、特にカトリック教徒の人たちは、死への準備をする、それ以外の人たちは毎日のように、1 日でも生きられたことを感謝して生きてるといような状況です。

そこで動物にどのような役割があるのかも目撃してまいりました。1 人の看護師が在宅を訪れたこともございました。そのときにおばあさんが出てきて、おばあさんがクジャクが叫んでいると言ったわけです。家族に向かって、クジャクはいますかと言いますと、いえ、クジャクなんていないよと言いました。そして、またおばあさんと話をいたしました。その後、またおばあさんがクジャクがうるさいと言ったわけです。この近所にクジャクっているんですかって、その方は聞きました。でも、クジャクはいないということです。皆さんはクジャクが鳴いてるのを聞いたことがありますでしょうか。実際は本当に高い声でして、このような音を鳴らします。最終的に言ったのは、それはゴーストだということです。悲劇的な事故があって、30 人の方がそこで死んだんだということです。

そして、もう 1 人の看護師は、そういったことを感じるはなかったわけですけども、大体、夜 8 時 30 分ぐらいになりますと、おばあさんのベッドの周りに幽霊がいるというようなことを感じるわけです。そして、そのおばあさんが死ぬのを待っているというようなことを話してくれました。

ホスピスで仕事をしていますと、ある尼僧院に行ったわけですけども、小さなカトリックで終末期でした。そして、看護師が 1 日 3 回ぐらい見えますと、高齢の方が外の鳥を見ていました。そして、鳥は外で本当に自由に飛んでいる。私はずっとベッドに閉じ込められていると言ったわけです。外に行って、1 日 2 回、鳥にえさをやったらどうですかというふうに看護師は言いました。わかりましたと、その尼僧は言ったわけです。バードフィーダーを外に設置すると言ったわけです。そして、その後、1 日 2 回、3 回、外に出て行って、えさ台にえさを置いて、そこで彼女は元気になりました。毎日、死のために準備するのではなくて、毎日を楽しみにするようになったわけです。本当に終末期に関しまして、日々が楽しくなった、そして周囲の人もそうでした。

そして、回想とか思い出も重要です。あるヒスパニックの家族がいました。息子ががんで亡くなった人でした。30 代で息子を亡くした、そして 2 匹の犬を飼っていました。ベッドやリビングルームに、最後に犬を飼ってたわけです。犬はその家には入ってはだめだということです

けれども、少なくとも1日二、三回は犬を家の中に入れたらどうですかというふうに言いました。そうしてその後、1カ月くらい後だと思えますけれども、また訪問をしたとき、彼女が亡くなろうとしている瞬間に、犬はもう家の中の彼女の横にいたわけです。そして、そのような偏見のない犬の愛と一緒に彼女は亡くなっていったわけです。そのようなきずなは一生残ります。永遠のものです。

犬は、今持っているものをどうやって守ろうとか、今持っていないものをどうやって手に入れようか考えて眠れないようなことはない。犬には愛と誠意以外には、余計なものはない。【スライド 35】

こちらは、レオ先生が大学で自転車に乗っている写真です。ということで、そろそろ終わりということです。皆様、ありがとうございました。本日は……されまして、ありがとうございました。【スライド 36】

そして、ジェームス・ハリス博士ですけれども、こういった言葉を残してらっしゃいます。ことしのオーストラリアの勲章の受章でもあります。ペットには、みんなペットを持つ価値があるということです。【スライド 37】

ということで、本日はこのセミナーに御招待くださりまして、ありがとうございました。【スライド 38】

○戸塚裕久 トーマス・カタンザーロ先生、どうもありがとうございました。

先ほど、私ちょっとお話しするのを忘れてましたけれども、まず最初に4名の先生方にお話をいただきまして、その後、ディスカッションの時間をちょっととってありますので、もし御質問あれば、その場でお願いしたいと思います。

人とペットのパートナーシップ

*** HABで得られるもの ***

トーマス E. カタンザーロ, DVM, MHA,
LFACHE

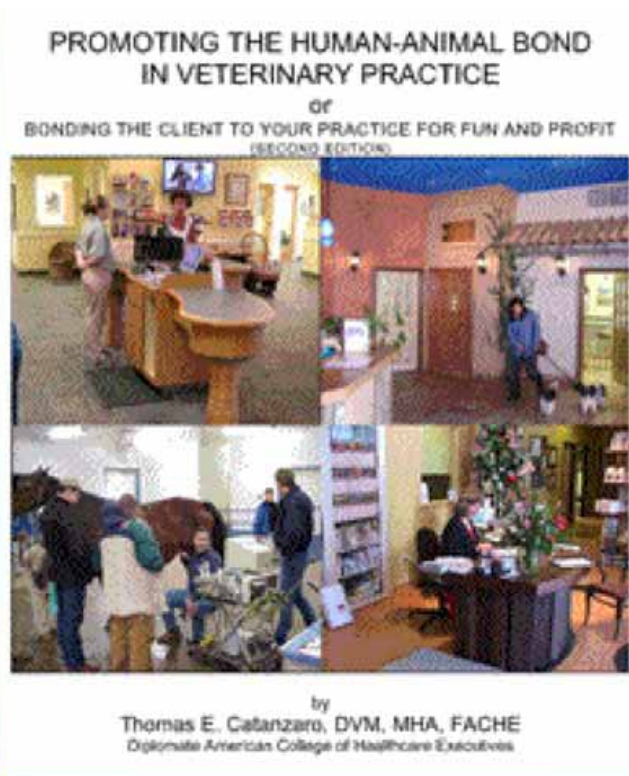
AVMA ビュースタッド コンパニオン アニマル
2012年度ヴェタリナリアン オブ ザ イヤー

【スライド 01】

このオーストラリアから来た「外人」は誰?

- 私は1977年ー78年、横浜に住んでいました。それから1980年まで相模大野に住んで、麻布獣医大学で英会話を教えました。
- 私はデルタ協会のチャーターメンバーです。(1981)
- I am a charter member of American Association of Human Animal Bond Veterinarians (1983)
- Returned to Japan for Companion Animal speaking tour in 1994.
- I was a Board member of VET ONE, a partnership between Industry and HAB veterinarians (1999)
- I am the author of "*Promoting the Human Animal Bond in Veterinary Practice* (now in 2nd Ed, 2009)", it is a FREE download from VIN Library (www.vin.com)
- Moved to Australia in 2008, honeymooned in Japan 2010

【スライド 02】



動物病院におけるヒューマンアニマルボンドの普及活動

【スライド 03】

レオ・ビュースタッド先生

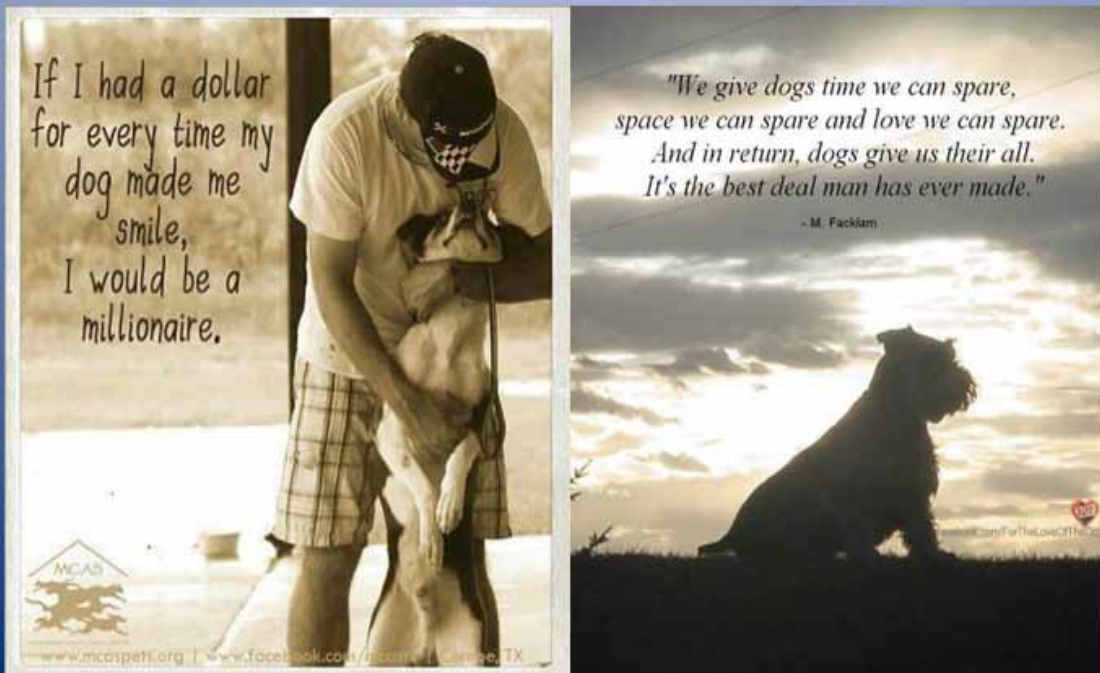
- ・ 私は獣医学を学んでいる時、最初にデルタ協会の会議に参加した際、初めてビル・マッカロック先生に出会いました。
- ・ ビル・マッカロック先生はデルタ協会の創設者のお一人で、彼のお蔭で、1981年に私はレオ・ビュースタッド先生をご紹介いただきました。
- ・ デルタ協会は創設者の先生方の愛と努力の結晶で、30年前に設立されたのです。HAB(Human Animal Bond)という言葉が最初に使われたのが、レオ・ビュースタッド先生でした。
- ・ 2012年、デルタ協会は「ペット パートナーズ」(Pet Partners)と改名し、ロゴも新しくなりました。
- ・ レオ・ビュースタッド先生は名実ともにHABの先駆者であり、私がこの分野で歩むきっかけを与えてくださった方です。

【スライド 04】



【スライド 05】

Human-Animal Bond



【スライド 06】

HABのあゆみ

- 1975年、ビュースタッド氏とリンダ・ハインズ氏が、WSU(ワシントン州立大学)にて、地域サービス活動のために、**People-Pet Partnership & Prison Pet Partnership**を開始。
- 1981年、PPPはマッカロック 兄弟と共に、オレゴンポートランド デルタ財団を設立。これがデルタ協会の前身である。
- 焦点: ペットの飼い主さん、ペット、世話をする人の関係を理解する。
- ペットが人間の心身の健康に与える効果についての研究資金提供。

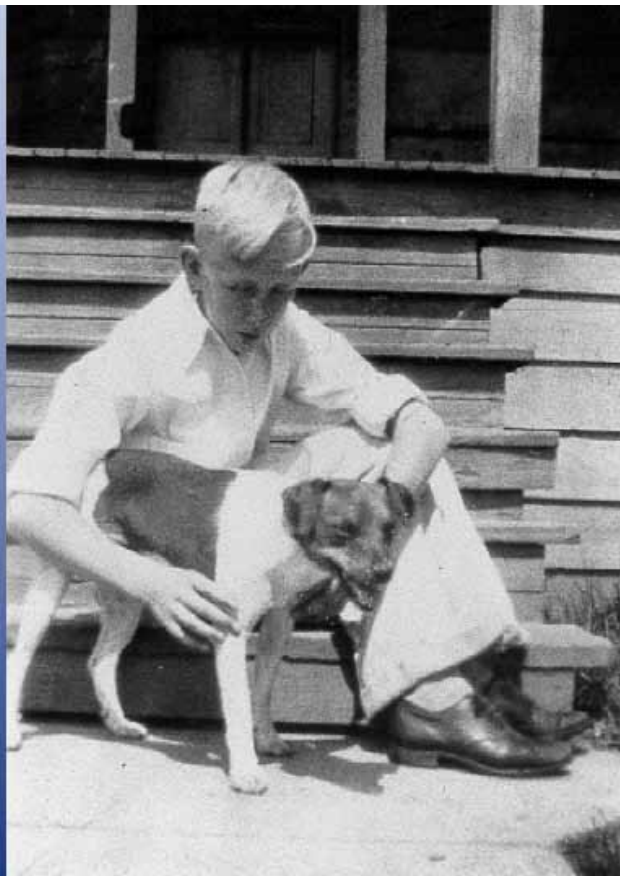
【スライド 07】

若き日のレオ
と愛犬

まだペットは、

**贅沢品
か
不要品**

と思われていた。



【スライド 08】

レオ・ビュースタッドのことば

「私はあなたに気付いて欲しいのです。我々のデモクラディーそして自由は、とても壊れやすいものであるということを。配慮、育成、そして継続的な用心なしには、失ってしまう・・・残念ながら、正直言うと、アメリカ人の大半が、自由とは自分の好きなことをする機会だと捉えている。そんな自由は、カサブランカ、サレルノ、アンツィオの中の人生にも値しない。」

“打ちひしがれる日がある。私の両親がノルウエーから求めてやってきた偉大なアメリカンドリームは、悪夢と化したわけだ・・・”

心の自由とは、基本的に倫理的、精神的なものであると私は信じる。

“真の自由とは、好きなことをすることではなく、しなければならぬことをする力である。”

【スライド 09】



For The Love Of The Dog

One of the oldest human needs is having someone wonder where you are when you don't come home at night.
~ Margaret Meade ~

あなたがどこにいるのか、いつ帰宅するのか、心配してくれる誰かがいるということが、昔から人間が最も必要としてきたものである。

【スライド 10】

動物は生活を変えてくれる

- **デルタ協会**が、動物がどのようにして障害や病気のある人たちの人生を変えられるかについて調査を開始。
- 1980代に科学知識の日常生活への応用に関する教材を制作。
- デルタ協会は、HAB研究のためのクリアリングハウスとなる。
- 1990代には地元レベルで直接サービスを提供。
- **動物介在セラピーのための包括的なトレーニング。**
- **サービスドッグのトレーナーにトレーニングシステムを提供。**
- **ペットパートナーズは世界中に提携団体を持つ。**

オーストラリアの、E.G. デルタドッグは、獣医看護師が「適切な行動」について学ぶ礎石となるプログラムである。

【スライド 11】



Did you know that when a dog sees its owner its brain secretes the same substances as ours when we are in love?

あなたの犬があなたを見つめるとき、あなたが恋しているときと同じ物質が脳から発生しているのです。

【スライド 12】

ルーチンワークの楽しみ

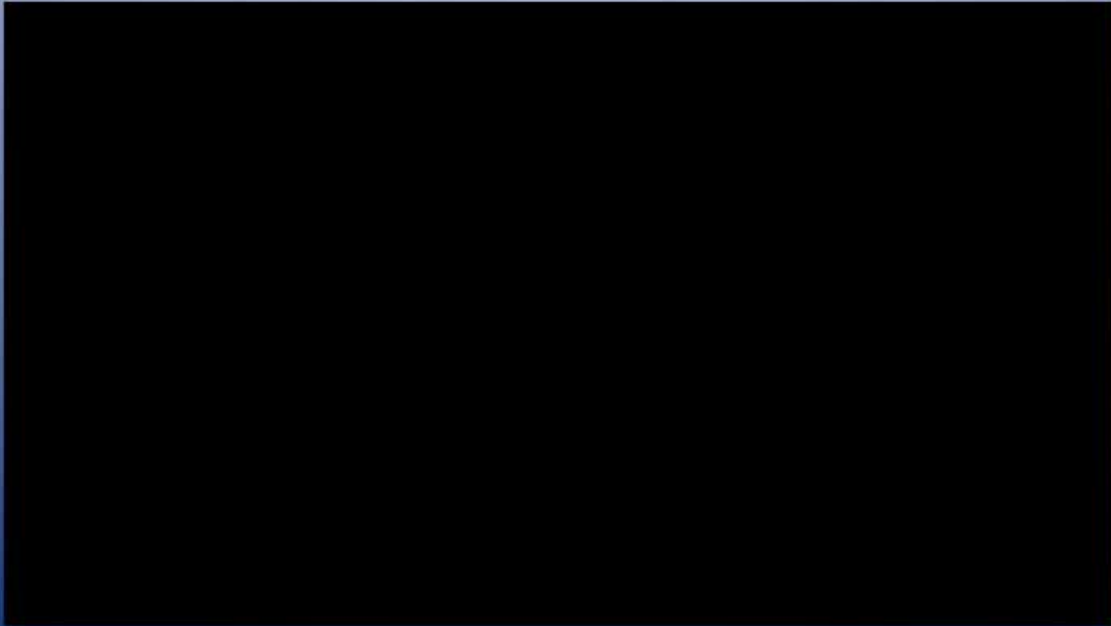
- 高齢者の生活の糧
 - テレビより鳥たち
 - 心臓手術後1年の生存率が5倍
- 食事(えさ)、ブラッシング、お風呂、散歩など、ペットにしてあげる日常のルーチンワークを楽しむ。
- ペットのために食事を準備し、与え、食べる様子を見ることは、喜ばしい経験である。
- 日常の世話やかわいがりの中で、声によるコマンドなしに目と目を合わせる(アイコンタクト)ことが、生活を豊かにする。

【スライド 13】

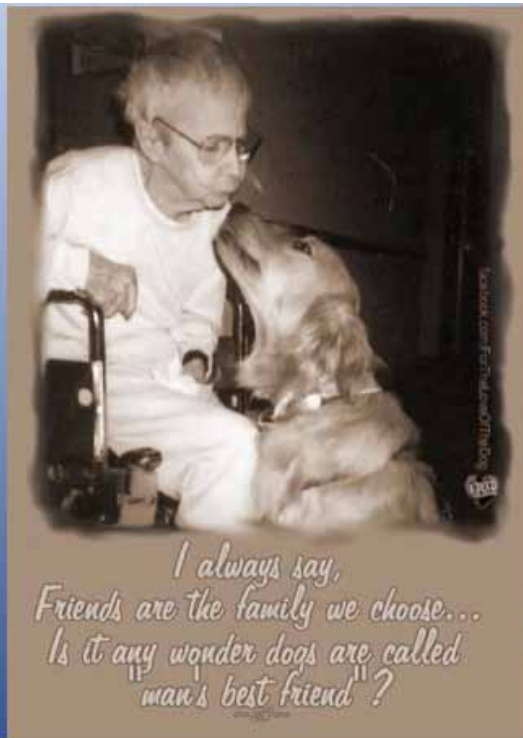
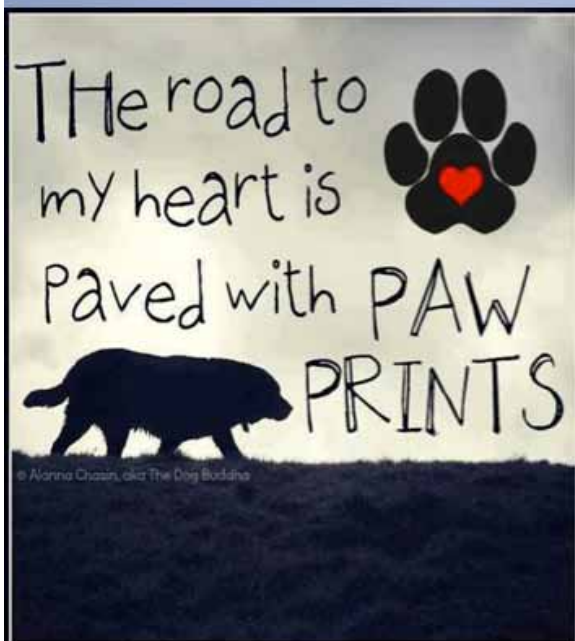


【スライド 14】

高齢コンパニオン以外のセラピードッグ



【スライド 15】



友達って、
私たちが選んだ家族なんだ
だから「犬」は「人間の一番の友達」なんだね。

【スライド 16】

動物はさまざまな文化の暮らしの中で なくてはならない大切な存在



【スライド 17】

コンパニオンアニマルは 私たちの人生を豊かにする

- 日常生活の中で、遊び戯れる時間を与えてくれる。
- プライベートでも公共の場でも、嬉しい時間がある。
- 肉体的、精神的 安全。
- 異種間(人間以外の誰かと)会話がある。
- 心理的、情緒的 成長。
- 育てる、世話をする機会を与えてくれる。
- 偏見なく公平な愛情、献身。

【スライド 18】

自閉症とアニマルセラピー



【スライド 19】

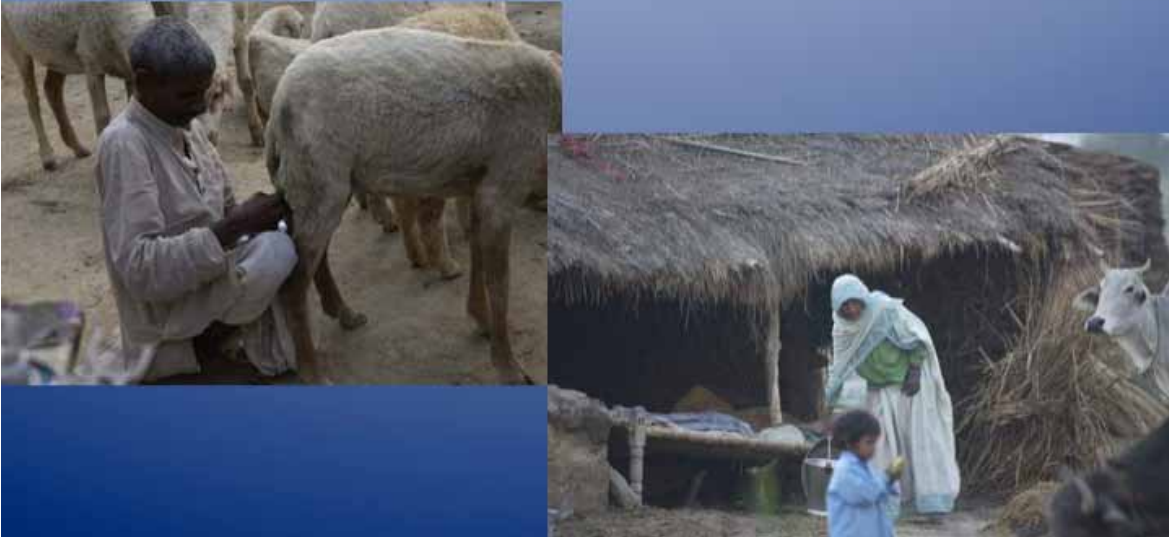
My sunshine doesn't come from the skies,
it comes from the love in my dog's eyes



サンシャインは空から降ってくるものじゃなくて、
私の愛犬の瞳の奥からやってくる。

【スライド 20】

動物はミルク、ウール、移動手段、
畑仕事などに使われ、
糞は乾かして料理のときの燃料になる。



【スライド 21】

憲章の理解

- AAT(動物介在療法)の歴史は人類の歴史とほぼ同じである。そしてAAA(動物介在活動)が始まった。
- HAB は動物と彼らに関わる人間との間に存在する無償の愛であると言える。また動物がいかに私たちの人生を豊かにしているかを説明するための用語でもある。
- HABについて、動物は下心がない。エサとシェルターがそうだという人もいるが、それらが主でないことは経験上明らかである。
- 例:

「彼の犬は無情にもスピード違反の車にはねられた。彼は犬を抱きかかえ、道路端に座り込んで泣いた。犬は彼の顔を見上げ、最後の力を振り絞って彼の涙を舐めた。」

【スライド 22】



NO WORDS
ARE NEEDED

ことばは いらない

【スライド 23】

動物中心の考え方

- 動物はリラックスするとき、体も頭も心も休める。人間はそこまで完璧にリラックスすることができない。
- 動物にとってのストレスは、喧嘩か喧嘩になりそうな刺激を受けることである。人間はしばしば自分の存在の意味を自問し、ストレスを感じる。
- 動物は私たちの気分を向上させ、人生の質を充実させ、「今」をどう生きるかを教えてくれ、日常の世話をしてくれる人への「与える」関係に 誠実である。
- これらの資質はAAAや AAT、そしてその他のHABの關係に 不可欠なものである。

【スライド 24】

HAB インターアクション



【スライド 25】

ペットとのボンディング(絆)

- **2011 AVMA の調査:**
 - 犬を飼っている人の、66.7%が家族の一員、32.6%がコンパニオン、そして0.7%の人が所有物だと考えている。
 - 猫を飼っている人の、56.1%が家族の一員、41.5%がコンパニオン、そして2.4%に人が所有物だと考えている。
 - 動物病院の壁の外で何が起きているのかを批判するのは辞めよう。HAB は健全に存在している。
- アメリカを震撼させた9-11事件後、買い物や映画、レストランに行くのが怖くて家にこもる人が増えた。でもそこには喜ぶペットがいた。
- ストレス状況下では、コンパニオンシップが増える。コンパニオンの偏見のない愛は癒しを与えてくれる。
- ペットはストレスや疎外感を減少させてくれる。孤独感を予防し、うつを緩和し、ほとんどの人間関係と違って、何の陰謀もない。

【スライド 26】

軍事犬



【スライド 27】

傷ついた兵士

- 退役軍人はPTSDに苦しむ軍人たちのためにセラピードッグのトレーニングを行っている。
- 癒し効果 – 不安レベルの低下
- 肉体的、感情的安定
- 偏見のない愛のあるコンパニオンシップ
- PTSD治療の投薬を減らす
- トレーニングをする人、される人両方に効果

【スライド 28】

PTSD セラピー



【スライド 29】



【スライド 30】



小児癌病棟



- テキサス・サン アントニオ
 - ベイラー大学 タイム
- 癌の子どもたちのために「ウサギの耳」
 - 孤独で暗く重苦しい病棟
 - 新しい種類の動物、感触が良い
 - 躰、トレーニングがしやすい
- 想定以上の効果
 - スタッフ・プロバイダーの出入りが活発化
 - 患者もプロバイダーもムードが明るくアップ
 - 動物由来感染症の心配は今のところない

【スライド 31】



YOU CAN EASILY JUDGE
THE CHARACTER OF A MAN



BY HOW HE TREATS THOSE
WHO CAN DO NOTHING FOR HIM.

— JAMES D. MILNER

セラピー！（治療）



DogHeirs.com

セラピードッグのある一日...
犬は純粋な愛。犬は家族。

その人のために何もできない、こんな小さな
命をどう扱うかで、その人の人格がわかる。

【スライド 32】

サナトロジー

- コンパニオンアニマル、ホスピスを含む
死に対する私のコンセプトの紹介
 - キュブラー ロス 死の需要5段階
避妊、怒り、取引、抑鬱、受容
 - Appendix N, VIN テキスト (無料ダウンロード)
- Bullet 21 – ロングアイランドへの道
毎日曜日最初の20を訪問
 - コンパニオン – 全てパウンドから 引き取られた
 - 保護と偏見のない愛
- ホスピス – 最後の時を快適に
 - さけぶクジャクの話
 - コミュニケーションの容易化(尼など)
 - 回想・思い出

【スライド 33】

永遠に...



【スライド 34】



Dogs . . . do not ruin their sleep worrying about how to keep the objects they have, and to obtain the objects they have not. There is nothing of value they have to bequeath except their love and their faith.
Eugene O'Neill

犬は今持っているものをどうやって守ろうかとか、
今持っていないものをどうやって手に入れようかとか
考えて眠れなくなるようなことはしない。
犬には愛と誠意以外に余計なものは何もない。

【スライド 35】



【スライド 36】

そろそろ終わりに近づいて参りました。

お家に帰って あなたの愛するペットを
ハグしてあげてください。

お願い - ビュースタッド賞受賞者、今年のオーストラリア
勲等受賞者であり、現在タスマニア在住の
ジェームス ハリス博士の言葉を覚えておきましょう。

EVERY PET DESERVES A PET!

ペットにはみんなペットを持つに値する。

HABのお話をさせていただく機会に感謝します。
ご清聴ありがとうございます。

Tom Cat >-*<*

【スライド 37】

The Human-Animal Bond



【スライド 38】